生き方を見つめて

壮春グラフィティ

職業の選択肢 広げたい

知的・精神障害者のビジネス支援

専門スクール運営 佐藤悟さん（50）

「知的・精神障害者の職業の選択肢を広げたい」と語る佐藤悟さん＝東京都板橋区で

静かな室内に、カタカタとキーボードを打つ音が響く。今春に開校した知的・精神・発達障害者のための「FTL（フェスティーナレンテ）ビジネス・スクール」（東京都板橋区）。十八歳から四十歳代の十六人が、パソコンやビジネスマナーを学ぶ。受講生は質問があるとそっと手を挙げ、講師が駆け寄って個別に対応する。

「知的・精神障害の方にパソコンは無理でしょうと言われますが、この様子を見れば驚かれると思います」。健常者と同じように、受講生らを一般企業の戦力として事務職で雇ってほしい。運営する佐藤悟さんの願いだ。

山形県出身。中学卒業後から新聞配達をして大学まで通った。テレビ局のAD、出版社や印刷会社の営業などを経て、三十五歳の時に求人広告の代理店を起業。私生活では結婚後、知的障害がある長女（一五）を授かった。

「少しでも娘にお金を残そうと、稼ぐことで精いっぱいだった」。仕事が軌道に乗り始めた二〇〇四年秋、長女が通っていた小学校の隣にある作業所を、ふとのぞいてみた。まじめに働く障害者たち。給料を聞いて、がくぜんとした。多くて月一万円。年金を入れても、自立はできない。

「娘の人生には、おそらく結婚も子育てもなく、施設に行くしかない」。涙を誘うような話ではなく、現実だと訴える。「それなら好きな仕事をして、友達との旅行や映画、おしゃれと、女の子の楽しみを知ってほしい」

知的・精神障害者が十八歳で特別支援学校を卒業した後、仕事といえば、パンや小物作り、配膳、掃除などが定番だと感じていた。「職業の選択肢を広げたい」。目を付けたのが、企業が障害者の雇用を促進する目的でつくる「特例子会社」だった。早速、企業に設立を呼び掛ける活動を始めたが、七年たった今も、寄せられるのは身体障害者を求める声ばかり。「知的・精神障害者でもできることは多いのに、どんなに説明しても分かってもらえない」

それなら人材を育てて企業関係者に会ってもらおうと、会社「フェスティーナレンテ」を設立、ビジネススクールを始めた。ラテン語で「ゆっくり急げ」を意味する一見、矛盾する社名には「焦らなくてもいいから、二年間という限られた学びの時間を大切にしよう」との思いを込めた。

「結局、娘は障害が重くてこのスクールには通えないんです。でも障害者の世界にだって、いろんな専門学校があっていい」。将来は介護や農業のスクールも、と夢は広がる。

（発知恵理子）

縁・結・び

▼「FTLビジネス・スクール」＝電03（6904）1095＝は、受講生を募集している。東京都指定の就労移行支援事業所で、利用料は所得に応じて異なるが、ほとんどの場合が無料。週1回2時間からや、パソコンのみの受講も可能。相談や見学は随時受け付けている。佐藤さんらはNPO法人特例子会社推進会＝電03（6904）1281＝の活動も続けている。

▼名古屋市東区の「C・O・College」＝電052（935）3824＝は、知的障害者が対象の就労支援学校。4月入学が基本で、日常生活から専門的な訓練まで学ぶ。運営はエム・オーヒューマンサービス（名古屋市千種区）。

妻と夫の定年塾

続婚契約

夫婦の間で毎年結婚記念日に「結婚契約書」を取りかわす友人がいる。一方が解消したいと言えば、別れるしかないのだ。星美さんがその話をすると、夫の健三さんは「スリル満点だなあ」と青ざめた。

「それでね、私も考えたのよ。続婚契約っていうものなの」と星美さんは切り出した。

「長いこと夫婦やってると緊張感が薄れます。友だちの場合はご主人の浮気が原因だったけど、私のは違うの。六十七歳にもなれば女もくたびれますよ。死ぬまで夫を世話するのかと思うと、逃げ出したくなるってみんな言ってるわ。もちろん男にも言い分はあるでしょ。そこで、お互いを年に一度査定して、話し合っていい方向へ持っていく契約です」

イラスト・入江めぐみ

健三さんはうーんと考え込んだ。妻は家事が好きなんだと思い込んでいた。料理も得意だし、健三さんは「おいしい」とほめるので、よい夫だと自信があった。男の料理教室に通ったことはあるが、家では作らない。

だが、男が三度のめし作りから介護まで妻を頼り切れば、ばあさんになるばかりの女もつらいだろう。逃げ出したくもなるだろう。

「その査定ってのは、つまりおれが自分のことは自分でやれるか、一人で生きていける男かどうか、ってことだね」

「私の方もあなたに甘えて、いい気になってちゃだめなのよ。力仕事や修繕なんかもできないとね。病気の時も二人で助け合って、仲良く結婚生活を続けるための契約です」

「続婚契約でおまえにぞっこん、なんちゃって」と健三さんは賛成した。

（西田小夜子＝作家・夫婦のための定年塾主宰）

生活

つれあいにモノ申す

まさに横幅たそがれ

●ストレス

「ストレスなんて、俺にはない」と言い切るあなた。そうでしょ、そうでしょう。周りの人たちにストレス、まき散らしているんですから。たまるわけがない!!（たまったもんじゃない妻・61歳）

●後ろ姿

「うちら、食うや食わずの生活ね」。冗談を。おまえは食うわ、食うわの毎日。後ろ姿は「横幅たそがれ」（スリムな夫・69歳）

●入れ歯

捜し物が多い妻。診察券、回数券、貸した腕時計…。「やっぱり不便だわ」。今度は何をと思いきや「私の入れ歯だと。（捜し上手な夫・75歳）

●ボケナス

毎日のように「ボケ、バカだね。おまえは」と言う夫。自分はよほど頭がいいと思っている。ナスを漬けるのに、塩ではなく、砂糖を入れたあんたの方が、よっぽどボケでしょ!（口撃される妻・66歳）

●粘着テープ

「ゴミが落ちている」「髪の毛が落ちている」とうるさいダンナ。「たまには掃除機をかけて」と頼んでも、一向に動いてくれない。それなのに私が掃除後、粘着テープを持って部屋を歩き回る。やめて!（いつも掃除当番の妻・52歳）

●口癖

「早く死にたい」が口癖の夫。食前、食後に必ず「薬、薬」と大騒ぎ。（本音を知りたい妻・70歳）

●洗面台

洗面台を磨いても、すぐに汚す主人。「美しさを保つために、毎日頑張っているんだから。もう…」。文句を言うと、「その割に効果がないなあ」と私の顔をのぞき込んだ。そうじゃないでしょ!（磨き続ける妻・59歳）

感謝編

「薬」連呼する不思議

●スープ

歯が痛くて「食事が取れない」と言うと、「俺流のスープを作ってやる」と夫。さっとチーズ、トマト、ご飯、牛乳をミキサーに入れて冷たいスープを作り、食べさせてくれた。（涙が出た妻・55歳）

▼「つれあいにモノ申す」　長年連れ添った夫や妻への注文を。「感謝編」「家族編」も随時掲載します。電子媒体での使用もあります。

投稿募集

住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記

〒460-8511 中日新聞生活部

FAXは 052（222）5284

Eメールは seikatu@chunichi.co.jp